

エチオピア初の私立博物館 —— シェリフ・ハラール博物館

八〇以上のエスニックグループ、二〇〇以上の言語が存在するといわれるエチオピアでは、多様な価値体系を尊重した文化保護政策の必要性が叫ばれつつある。それと並行して、コミュニティのあいだでは、地域社会主導の文化遺産の管理や展示・表象の気運が高まっている。



ムスリムの宗教的、文化的中心地ハラール市

エチオピア東部に位置するハラール州の州都ハラール市は、ムスリム（イスラーム教徒）の宗教的、文化的中心地であり、沿岸部とエチオピア内陸部を結ぶ交易拠点として栄えてきた。一六世紀につくられたジュゴルとよばれる門をもつ城壁のなかに入ると、細い路地を行き来する女性たちの色鮮やかな民族衣装が、城壁の白い壁と、真つ青な空によく映えてまぶしい。日が沈むと、どこからともなく、預言者を称える詩「メンズマ」の詠唱が聞こえてくる。城壁のなかの旧市街は、二〇〇六年に「歴史的城塞都市ハラール・ジュゴル」の名で、ユネスコの世界文化遺産に登録された。ここでは、織物籠、製本、貨幣にみうけられるように、独自の優れた物質文化が育まれてきた。フランスの詩人アルチュールランボーが、この街に魅了され、移り住んだ話は有名である。エチオピア屈指の観光地として、国内外のツーリストを魅了するハラール旧市街のなかに、シェリフ・ハラール博物館がある。二〇二一年の一〇月にわたしは、エチオピア初の私立博物館としてスタートしたことで知られるシェリフ・ハラール博物館を訪れた。

私立博物館から市民の博物館へ

館長のアブドゥラヒ・アリ・シェリフ氏は、一九九〇年代前半から、ハラール市にちなむ物品を丹念に収集してきた。一九九八年に、アブドゥラヒ氏の自宅が、エチオピア初の個人所有の博物館としてオープンする。ハラールの市民も、「自分たちの文化遺産を自分たちの手で守り保管しよう」というアブドゥラヒ氏の意気込みに共感し、多くの物品を当博物館へ寄贈した。ハラール市民のなかには、普段使っている日用品の文化遺産としての価値を、アブドゥラヒ氏の活動によって気付かされ、それらの収集を始めたものも多い。

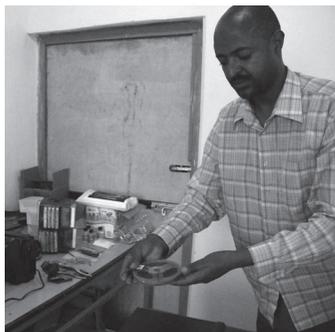
その後、ユネスコとノルウェー政府からの資金援助を受け、当博物館は、アブドゥラヒ氏の自宅から、ハイレ・セラシエが皇帝に即位する前に住んでいた館「ラストファリの家」（一九二一年建築）に移った。さらに二〇〇七年には市営となって、シェリフ・ハラール博物館として再オープンする。当博物館には、この地域に住むハラリ、オロモ、アムハラ、グラゲ、ソマリ、アルゴバ等のエスニックグループに関連する織物、宝飾品類、籠細工品、農器具等の日用品や絵画が展示されている。エチオピアの近代化に多大な貢献をした皇帝メネリク二世のライフルや剣をはじめ、一九世紀の著名な戦士たちの武器や階級記章等、エチオピアの歴史上の重要人物の持ち物も展示されている。またイスラーム法に関連する多くの書物や、ハラール市にちなむ音楽が記録されたオープンリールテープやカセットテープが、何百と所蔵されている。

音源の保護

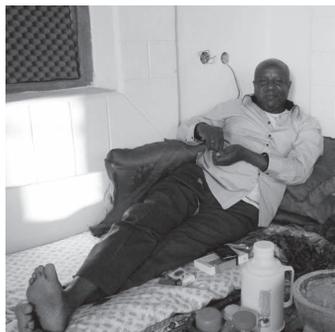
アブドゥラヒ氏が記録してきた音楽は、前述のメンズマの詠唱をはじめ、イスラーム神秘主義の儀礼ジクルにかかわる音楽や、結婚式などの祝祭儀礼で歌われる伝統歌など、その土地の文化と歴史が凝縮した無形文化遺産ともいえる。なかには今ではすでに失われてしまったものもある。しかしながら、これらの音楽を記録したテープのなかには、完全に破損したり、劣化が著しく進んだものが多く含まれる。そんななか、貴重なテープ音源をデジタル化して保管する作業が、イタリア人民族音楽学者シモーネ・タルシタ二氏の協力のもと、数年前に始められた。この作業に必要なリールテーププレーヤーや音の編集ソフトが入ったパソコンは、タルシタ二氏からアブドゥラヒ氏に寄贈された。現在アブドゥラヒ氏は、数名の博物館スタッフとともに、定期的に訪れるタルシタ二氏から音源のデジタル化作業を学んでいる。今後、少しずつではあるが、音源のデジタル化作業が進められ、展示に取り入れられる予定である。近い将来、シェリフ・ハラール博物館の色鮮やかな展示品のなかに、これらの音源がどのように組み込まれて展示されるのか注目したい。

川瀬 慈

民博文化資源研究センター



リールテープ音源のデジタル化作業



館長アブドゥラヒ・アリ・シェリフ氏



書物の展示



民族衣装の展示



シェリフ・ハラール博物館